『般若灯論』における ミーマーンサー学派批判
――漢訳とチベット語訳の相違箇所に着目して――

田　村　昌　己

1. はじめに

中観派の学匠バーヴィヴェーカ（Bhāviveka, ca. 490–570）は主著『中観心論』第9章をミーマーンサー学派批判に充て，「ヴェーダ聖典が説く祭式行為のみが解脱獲得手段である」[1] というミーマーンサー学派の見解を中心に，ヴェーダの常住性・祭式行為・アーガマ・推論・一切智者等のトピックについて広く論じている．さらに彼は『般若灯論』第22章においても，いわゆる「付論」[2] として如来の一切智者性を巡る議論を展開する中で，ミーマーンサー学派批判を行なっている．これらの批判は，ディグナーガ・クマーリラ・ダルマキールティを中心とした5–7世紀のインド哲学史の展開を探る上で貴重な資料であり，今後より精緻な分析がなされなければならない．

また近年，van der Kuijp 2006と Krasser 2011; 2012を踏まえ，Akahane 2012; 2013; 2014; 2015が漢訳の再評価とそれに関連する『般若灯論』成立過程の考察を試みる一連の研究を発表したことで，『般若灯論』研究は新たな段階に突入した．今後の『般若灯論』研究には，漢訳とチベット語訳の相違と『中観心論』との対応関係を分析しつつ，様々なテキスト成立・伝承過程を想定しながら，テキストを読解していく作業が必須である．『般若灯論』におけるミーマーンサー学派批判を扱う研究はいくつか存在するが，上記作業を踏まえた研究はなされていない[3]．

ところで Akahane（2013, 126）は『般若灯論』の「付論」部分に着目して，次のような成立過程を仮説として提示する．

> Ur-PP（「付論」なし）→PP1（漢訳の基になったもの・一部の「付論」を含む）→PP2（チベット語訳の基になったもの・全部の「付論」を含む）

『般若灯論』におけるミーマーンサー学派批判は「付論」部分でなされており，またそれは漢訳とチベット語訳の両方に存在するから，Akahane の提示する成立

過程に照らせばPP1の段階で登場したことになる．しかしながら興味深いことに，同批判には漢訳とチベット語訳で全く異なる議論がなされる箇所が存在する．先行研究はこの相違に全く注意を払っていないが，両翻訳をそれぞれ考察した場合，どのように評価できるだろうか．

本論文では，当該の両翻訳相違箇所に焦点を当てて考察し，『般若灯論』におけるミーマーンサー学派批判の一端を明らかにしたい．

2. 文脈

先述の通り，『般若灯論』第22章では「付論」として如来の一切智者性を巡る議論が展開される．その前半部分では異教徒一般を対論者とする議論，後半部分ではミーマーンサー学派を対論者とする議論がなされる．問題の相違箇所は後者の冒頭部分に含まれており，その議論展開は以下の通りである．

1. ミーマーンサー学派の反論[4)]
［主張：］如来の教説は一切智者ならざる者によって述べられたものである．
［理由：］作者を有するから．
［喩例：］ヴァイシェーシカ学派等の聖典のように．
2. バーヴィヴェーカの回答（1）：？？？［相違箇所］
3. バーヴィヴェーカの回答（2）：証因＝不定因

ミーマーンサー学派の主張として提示される上記推論式に対して，二つの回答が与えられる．第一の回答が問題の相違箇所である．それに続く第二の回答では，上記推論式の証因〈作者を有すること〉は不定因（anaikāntika）であるという過失の指摘がなされる[5)]．

3. 漢訳の議論

以上の文脈を踏まえ，問題箇所の検討に入ろう．まず，漢訳の議論は以下の通りである．

【答論】もし〔君が如来の教説は〕作者を有する〔と考える〕ならば，君の提示する証因（〈作者を有すること〉）の意味するところは不成立である．なぜか．如来は，教化されるべき衆生がいることを見ることで，意思的努力なしに自ずから言葉を発している．ちょうど，天の太鼓が空中で自ずから鳴るのと同じである．このように，我々の教説においては作者も享受者も決して存在しないのだから，君が提示する〈作者を有すること〉という意味のこの証因は不成立である[6)]．

如来の教説は意思的努力なしに自ずから発せられるものであり，その作者（説き手）は存在しない．ちょうどそれは，打ち手がいなくとも天の太鼓から自然と音が流れ出るようなものである．この議論は，『大乗荘厳経論』（MSA IX 18–19）や『摂大乗論』（MSg VIII 17）に見られ，いわゆる一字不説の説法観――如来は常に三昧に入っていて何ら説法をしていない――を前提としている．如来の一字不説は『般若灯論』の別箇所（『根本中頌』第25章第24偈への直接的な注釈部分・両翻訳に存在）で論じられていることから[7]，ここでバーヴィヴェーカは，自身のそうした説法観に基づいて如来の教説の無作者性を示していることになろう．また如来の一字不説は，クマーリラが一切智者批判の文脈で批判し，さらにシャーンタラシクシタがそのクマーリラの批判を引用するなど[8]，後代においても一切智者論における一つのトピックになっている．

漢訳は以上の議論を根拠に「証因〈作者を有すること〉は不成因（asiddha）である」という批判をなしており，回答全体としては不成因→不定因の順で証因の過失を指摘していることになる．

4. チベット語訳の議論

次に，チベット語訳の議論を見てみよう．

【答論】彼らの主張命題の意味するところもまた，考察を加えた上で，先の場合と同様に，過失が述べられるべきである[9]．

漢訳とは異なり，チベット語訳では主張命題の過失が指摘されている．それ故，回答全体としては主張命題の過失→証因の過失（不定因）の順で上記推論式の過失を指摘していることになる．

ではどうして主張命題の過失となるのか．アヴァローキタヴラタによれば，ここで言われる「先の場合」とは，第22章「付論」冒頭の議論を指している[10]．「付論」冒頭で対論者（異教徒一般）の推論式「［主張：］如来は一切智者ではない．［理由：］人間だから．［喩例：］彼以外〔の人間〕のように」[11]が提示されるが，これに対して，証因と喩例の過失を指摘した後に[12]，主張命題の過失を指摘するのが問題の先行議論である．この議論は漢訳とチベット語訳の両方に存在する．

まずもって「〔如来は〕一切智者ではない」というその主張命題の意味するところは何か．

(1) 一切は知らないが何らかのものは知っているのか，それとも (2) 全く何も知らないのか．そのうちで (1) 前者の選択肢のように認められるならば，彼は何を知らないと認められるのか．もし感官を超えたもの〔を知らない〕と言うならば，［主張：］彼はそれを知る．［理由：］認識対象だから．［喩例：］自身の掌に置かれた無垢なるマニなどのように．あるいは，(2) 後者の選択肢のように認められるならば，(a) 先の主張に対する排斥と，(b) 常識による排斥がある．すなわち〔前者 (a) に関しては〕「彼は人間であるから」と〔対論者自身によって先に〕承認されているから〔妥当せず〕，〔後者 (b) に関しては〕凡夫などの喩例は世間の常識によって妥当しない．彼ら（凡夫など）も何らかの対象を知るからである[13]．

「一切智者ではない」の意味として，(1) 何らかのものを知っている，(2) 全く何も知らない，という二つの可能性が挙げられる．対論者の主張命題は，(1) の場合には推論によって排斥され，(2) の場合には対論者自身の承認と常識とによって排斥される．すなわち，(1) に関しては，如来が知らないものとして感官を超えたものを想定したとしても，如来がそれを知ることを確立する推理が存在する．(2) に関しては，人間が全く何も知らないということはあり得ないから，「如来は人間である」という対論者の承認事項と矛盾し，また，常識とも矛盾する．このようにいずれの場合でも主張命題の過失となる．

チベット語訳はこの議論がミーマーンサー学派批判においても適用されることを示していることになる．なお (1)「何らかのものを知っている」場合の議論は『中観心論』のミーマーンサー学派批判においても見出せる[14]．さらに興味深いことに，クマーリラは『ブリハット・ティーカー』において「一切智者」(sarvajña) における「一切」(sarva) の意味を巡って議論を展開している[15]．

5. おわりに

以上，漢訳とチベット語訳の議論をそれぞれ考察した．漢訳の議論は『中観心論』に対応するものを見出せないが，その内容からしてバーヴィヴェーカ自身のものであっても差し支えない．議論として十分に評価できるものであり，決して無視や軽視をしてはならない．一方，チベット語訳の議論も意味ある議論であり，『中観心論』にも対応する．いずれの翻訳も有意味な議論であるというこの状況をどのように解釈すべきなのか．様々な想定が可能であるが，先の Akahane の仮説に従うならば「PP1→PP2」の間に「付論」内で「書き換え」がなされた可能性も浮上しよう．いずれにせよ，この問題の解決のためには，本論文が試みた作業―両翻訳の相違と『中観心論』との対応に留意しながら，両翻訳が前提とす

る『般若灯論』（PP1 と PP2）をそれぞれ丹念に描き出す作業―を，『般若灯論』全体に亘って実施する必要があり，今後取り組むべき課題である．

1）MHK IX 1–2 参照.

2）『般若灯論』における「付論」（digression）については Krasser 2011 及び Akahane 2013 参照.

3）例えば，ミーマーンサー学派批判全体に亘る翻訳研究として西山 2015 及び野澤 2015 があるが，いずれもチベット語訳に基づくものである.

4）PPr T30.119b15–17: 復有彌息伽外道言．佛家所説十二部經者，非一切智人所説．有作者故．譬如鞞世師等論．; D215a4–5, P269b4–5: dpyod pa can dag las kha cig gis smras pa / de bzhin gshegs pa'i gsung rab ni thams cad mkhyen pa ma yin pas smras pa yin te / byed pa po dang bcas pa'i phyir dper na / bye brag pa la sogs pa'i bstan bcos bzhin no //

5）PPr T30.119b21–22; D215a5–6, P269b5–6.

6）PPr T30.119b17–21: 論者言．若有作者，汝出因義不成．何以故．見有可化衆生故，如來無功用自然出言説．猶如天鼓空中自鳴．如［是］* 我法中作者受者皆無故，汝立有作者義是因不成．（* 文脈を考慮し「是」を補う.）

7）PPr T30.130b22–29; D240a5–7, P301a3–7.

8）ŚV codanā 138, TS 3240–41（=*Bṛhaṭṭīkā*）．Kataoka（2011, 370–371［nn. 429–430］），吉水（2015, 10–13［n. 33］），Ham 2019 参照.

9）PPr D215a5, P269b5: de dag gi dam bcas pa'i don kyang rnam par brtags nas snga ma bzhin du skyon brjod par bya'o //

10）PPrṬ D za 200a4–b1.

11）PPr T30.118c22–23: 如來無一切智．是人故．譬如餘人．; D214a4, P268a6–7: de bzhin gshegs pa ni thams cad mkhyen pa ma yin te / mi yin pa'i phyir dper na de las gzhan bzhin no //

12）PPr T30.118c26–119a7; D214a6–b1, P268a8–b4.

13）PPr D214b1–3, P268b4–8: thams cad mkhyen pa ma yin no // zhes dam bcas pa de'i don kyang re zhig gang yin / ci thams cad ni mi mkhyen la / cung zad mkhyen pa yin nam / 'on te cung zad kyang mi mkhyen pa yin / de la gal te brtag pa snga ma ltar 'dod na ni des ci zhig mi mkhyen par 'dod / gal te dbang po las 'das pa'o zhe na des de mkhyen te / shes bya yin pa'i phyir nyid kyi phyag mthil du nor bu dri ma med pa la sogs pa bzhag pa bzhin no // 'on te brtag pa phyi ma ltar 'dod na ni phyogs snga ma la gnod pa dang / grags pas gnod de / de ni mi yin pa'i phyir zhes khas（D; khangs P）blangs pa'i phyir dang / so so'i skye bo la sogs pa'i dpe dag 'jig rten la grags pas mi rung ste / de dag gis kyang yul 'ga' zhig shes pa'i phyir ro // 提示した翻訳はチベット語訳に基づく．漢訳（T30.119a7–17）も全体の趣旨は変わらない.

14）MHK IX 164.

15）TS 3128–3156（=*Bṛhaṭṭīkā*）．Kataoka（2011, 321–322［n. 357］）参照.

〈略号表〉

MHK: *Madhyamakahṛdayakārikā*. 川崎信定 1992『一切智思想の研究』春秋社.

MSA: *Mahāyānasūtrālaṃkāra*. *Mahāyāna-sūtrālaṃkāra: Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule*, *Tome I*, *texte*. Ed. Sylvain Lévi. Paris, 1907. Reprint, Kyoto: Rinsen Book, 1983.

MSg: *Mahāyānasaṃgraha*. 長尾雅人 1987『摂大乗論　和訳と注解　下』講談社.

PPr: *Prajñāpradīpa*. T1566; D3853, P5253.

PPrṬ: *Prajñāpradīpaṭīkā*. D3859.

ŚV: *Ślokavārttika. Kumārila on Truth, Omniscience, and Killing. Part 1. A Critical Edition of Mīmāṃsā-Ślokavārttika ad 1.1.2* (*codanāsūtra*). Ed. Kei Kataoka. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2011.

TS: *Tattvasaṃgraha. Tattvasaṅgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Śrī Kamalaśīla*. Ed. Swami Dwarikadas Shastri. Varanasi: Bauddha Bharati, 1968.

〈参考文献〉

Akahane Ritsu. 2012. "An Examination of the Digression in Chapter 3 of *Prajñāpradīpa*." *China Tibetology* 2: 8–25.

———. 2013. "On the Digressions of the *Prajñāpradīpa*, with a Reevalution of Its Chinese Translation."『印度学仏教学研究』61(3): 124–128.

———. 2014. "Rethinking the Chinese Translation of the *Prajñāpradīpa*."『印度学仏教学研究』62(3): 153–160.

———. 2015. "Prabhākaramitra: His Name and the Characteristics of His Translation of the *Prajñāpradīpa*."『印度学仏教学研究』63(3): 201–207.

Ham Hyoung Seok. 2019. "Śāntarakṣita's Prioritization of Dharmakīrti's Thesis over Bhāviveka's in His Critique of *vedāpauruṣeyatva*."『印度学仏教学研究』67(3): 76–81.

Kataoka Kei. 2011. *Kumārila on Truth, Omniscience, and Killing. Part 2. An Annotated Translation of Mīmāṃsā-Ślokavārttika ad 1.1.2* (*codanāsūtra*). Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Krasser, Helmut. 2011. "How to Teach a Buddhist Monk to Refute the Outsiders: Text-critical Remarks on Some Works by Bhāviveka." *Dhīḥ: Journal of Rare Buddhist Texts Research Department* 51: 49–76.

———. 2012. "Bhāviveka, Dharmakīrti and Kumārila." In *Devadattīyam, Johannes Bronkhorst Felicitation Volume*, ed. F. Voegeli et al., 535–594. Bern: Peter Lang.

van der Kuijp, Leonard. 2006. "The Earliest Indian Reference to Muslims in a Buddhist Philosophical Text of Circa 700." *Journal of Indian Philosophy* 35: 169–202.

西山亮 2015「*Prajñāpradīpa* 第22章「如来品」の研究」龍谷大学博士論文. http://hdl.handle.net/10519/7015.

野澤静證訳・西山亮編 2015「軌範師清辨造根本中の註・般若燈の中の如来の観察と名くる第二十二品」『インド学チベット学研究』19: 236–258.

吉水清孝 2015『クマーリラによる「宗教としての仏教」批判——法源論の見地から——』RINDAS ワーキングペーパーシリーズ25, 龍谷大学現代インド研究センター.

（本研究は JSPS 科研費 JP19J01490 の助成を受けたものである.）

〈キーワード〉 バーヴィヴェーカ，ミーマーンサー学派，般若灯論，一切智者

（日本学術振興会特別研究員 PD，博士（文学））